

アーサー・コナン・ドイルと〈新しい女〉

三 神 和 子

I

シャーロック・ホームズの生みの親、アーサー・コナン・ドイル (Arthur Conan Doyle, 1859–1930) が女性の解放、権利獲得についてどのように思っていたのか全体像をとらえることは容易ではない。ドイルはイギリスやアメリカの新聞などにおいてイギリスにおける女性参政権運動に対して辛口の発言をしている一方で、¹ 1906 年から彼は離婚法改正協会の会長を 10 年にわたり務め、夫からの放棄や暴力に苦しむ女性の救済を目指して、当時女性に不利であった離婚法の改正に尽力するなど、女性の権利拡大を支持する側面も見せているからである。このドイルの気持ちはシャーロック・ホームズものでは、前者の女性参政権活動家の女性たちは「最後の挨拶」(“His Last Bow” 1817 年) で「窓破りの凶暴な女ども」(window-breaking furies) と表現され、後者は「アベ農園」(“The Abbey Grange” 1904 年) において夫から虐待されている妻を救うために夫を殺害した船長に無罪放免を言い渡す筋書で反映されている。アーサー・コナン・ドイルが女性の解放を支持していたのか、反対だったのか、事柄によって違うのか、また、時期によって違うのか、知りたいところである。

では、女性の解放を主張する権化ともいべき〈新しい女〉、つまり、職を得て経済的にも精神的にも自立した生き方を選ぶ女性をドイルはどう見ていたのだろうか？ 賛成したのだろうか反対したのだろうか？ ドイルが『緋色の研究』(*A Study in Scarlet*) によってシャーロック・ホームズを世に登場させたのは 1887 年であり、『ストランド』誌 (*The Strand Magazine*) に

「ボヘミアの醜聞」(“A Scandal in Bohemia”)を皮切りにホームズものの作品を発表し始めたのは、1891年である。この時期はいわゆる〈新しい女〉、つまり、職を持ち経済的にも精神的にも独立し、夫ではなく自分が自分の主人になり、自由に生きることを選ぶ女性たちが文学作品においても、現実の世においても出現し、一世を風靡するとともに世間を驚愕させた時期と重なっている。自由を求めて結婚を拒む女主人公を描いたオリブ・シュライナー (Olive Schreiner, 1862–1920) の『アフリカ農場物語』(*A Story of African Farm*) は1883年に、従来の結婚を批判しパートナーとの平等な関係を主張したモナ・ケアード (Mona Caird, 1854–1932) が「結婚」(“Marriage”)を『ウエストミンスター・レビュー』誌 (*Westminster Review*) に発表したのは1888年である。〈新しい女〉(New Woman) という名前は1894年の週刊『パンチ』誌 (*Punch*) の4月号、5月号において交わされたセーラ・グランド (Sarah Grand, 1854–1943) とウィーダ (Ouida, 1839–1908) のあいだの論争から名付けられ定着したものだが、〈新しい女〉は、〈アマゾネス〉や〈野生の女たち〉などと呼ばれながら、² 1894年以前にも、1880年代後半から1890年代にかけて登場し、世を騒がせていた。ドイルもこれらの女性たちの出現や主張を知っているはずである。確かにホームズものの中には〈新しい女〉の神器の一つである自転車に乗る主人公(「美しき自転車乗り」(“The Solitary Cyclist” 1904年)や、女性に経済的独立を果たさせるタイピストの職につく女性が登場するが(「花婿の招待」“A Case of Identity”, 1891年)、どちらも〈新しい女〉として描かれておらず、これらの作品によってドイルが〈新しい女〉についてどう思っていたのかを探ることは難しい。書簡などの中でドイルが〈新しい女〉について言及した言葉は今のところ見つかっていない。

しかし、ホームズものではないが、幸いにも〈新しい女〉を主人公として登場させ、女性解放の主張、とくに女性の専門職門戸開放と拡大の主張を物語の展開の要として大々的に織り込んでいる作品がある。中編小説『都市郊外にて』(*Beyond The City*, 1891年)である。この作品における〈新し

い女〉の扱われ方を考察することで、女性開放についてのドイルの考えの一端を探ってみたい。

II

『都市郊外にて』は1891年の夏に執筆され、その年の12月に『グッド・ワース』誌の特別クリスマス号に掲載された。1893年8月にJ. W. アロースミス社から単行本になっている。

この物語は、ロンドン郊外のノーウッドの「荒野」という地区にある3軒の郊外住宅（大家が同じ）をめぐるものがたりである。3軒のうち2軒はもうすでに埋まっており、1番住宅には提督として海軍で活躍したが今は引退したヘイ・デンヴァー提督（Admiral Hay Denver, 提督と呼ばれている）と夫人、ロンドンの証券取引所で働く24歳の息子のハロルド（Harold）が暮らしている。2番住宅には引退し自分の医学的関心に注意を向けているバルタザール・ウォーカー医師（Doctor Balthazar Walker）と年頃の娘クララ（Clara）と妹のアイダ（ida）が暮らしている。物語は最後の3番住宅に43歳の未亡人、ウェストマコット婦人（Mrs. Westmacott）と彼女の26歳の甥のチャールズ・ウェストマコット（Charles）が引っ越してくるところから始まる。新しい住人が引っ越してくるところから始まり、途中結婚にまつわる誤解があり、また、社会的・金銭的窮地にたつトラブルが起こり、その救済のあと二組の結婚で終わるこの物語は、ジェーン・オースティンの『高慢と偏見』に似たパターンを踏むコメディである。ドイル自身は自伝の中でこの小説を「自分には珍しい家庭小説」と言っている。³

大家のモニカ・ウィリアムズ、バーサ・ウィリアムズ老姉妹にとって、1番住宅と2番住宅の住人は申し分のない選ぶるに値する隣人であり、二人の心の平安を乱すことはなかったが、3番住宅に引っ越してきたウェストマコット夫人は二人の老姉妹を仰天させる存在であった。二人は、まず、彼女が引っ越しの馬車がついたとたんに驚く。「インディアン・クラブ」という体操用こん棒、一對のダンベル、ゴルフ・クラブ一式、テニスラケット

ト一本、クリケットバッグといった荷物に続いて、大柄で筋骨たくましい青年が辻馬車から降りてきたのだが、その青年が降りようとする女性をエスコートしようと手を差し出すと、その女性はその開いた手に激しい平手打ちを食らわせ、男性の手を借りずにひらりと馬車から飛び降りた(8)。⁴ その背の高い女性は男性のような髪形をして、フレアもギャザーもない足のくっきり見える短いスカートをはいていた。そして、御者に料金を支払う時に、おそらく料金のことで御者が不満を言ったのだろう、その女性は御者のスカーフを両手でつかんで御者を激しくゆすった後、馬車の車輪に押し付け、御者の頭を3回馬車の側面にぶつけ、「この下劣なごろつきめ、レディに図々しい真似をするとどうなるか教えてやる」(10)と言った。

そして老姉妹が訪問着を着込んで表敬訪問すると、家の中にはニシキヘビがいた。エルザと名付けてニシキヘビを飼っているのだ。そして彼女は二人に紅茶ではなく、スタウト・ビールを出そうとする。男性だけが爽快な運動や栄養のあるスタウト・ビールをたのしむことは、女性の副次的な地位を表しており(17)、スタウト・ビールを飲めば、女性も心身ともに活発になることができるので、女性も飲むべきだというのだ。これに対してモニカが、「女性には女性なりの使命があると思う」と言うと、彼女は「〈女性の使命〉なんて使い古された言葉は、男性が女性に課した制約に過ぎない」と真っ向から否定する(17)。ウェストマコット夫人はいわゆる〈新しい女〉なのである。

19世紀末に登場した〈新しい女〉は、19世紀の中流階級を中心に定着した女性の生き方に関する考え方、つまり家庭を守り夫に尽くして生きることこそが〈女性の使命〉であり、女性の幸せであるとした考えを否定し、新しい生き方を実践した女性たちのことである。19世紀には18世紀の産業革命による資本主義社会の誕生と中産階級の勃興にともなって、世襲でない自力による立身出世、社会的経済的上昇を可能にする社会が展開した。しかしこの社会は熾烈な競争社会であり、この競争に参戦する男性は兵士のごとく戦い、女性は銃後の守りとして家庭という癒しの場を男性に提供

しなくてはならなくなった。家庭という場が特別な価値を持つ存在となったのはこの時期である。この経緯の中で、家庭の外の公領域で戦う夫や父親が仕事の疲れを癒し明日への活力をためる場としての家庭を守るのが女性の本分であるとする考えがより強固になった。よって、女性の生きる領域は家庭という私的領域であり、家庭を出て、賃金を得る職を得て、経済的に独立したり、自己実現などしてはならないということになった。というより、女性には自己実現のための資質などないと思われていた。もちろんこの男女の役割分担・領域分離は、ウェストマコット夫人の言うように、神の摂理でも、自然の法則でもなく、兵士である男性が自分たちの都合のよいように勝手に作ったものである。この押し付けの生き方を否定し、自分なりの新しい生き方を女性たちは模索したのであるが、それぞれが自分なりの自由な生き方を求めたことから、この〈新しい女〉の画一的な定義はない。しかし、よく見られる特徴をあげれば、「中産階級で、独身で、大学教育を受けていて、博学で、収入のある仕事をしていて、運動好きで、合理解を着ていて、性にたいして率直で、政治上の性的平等を手に入れようと望んでいて、伝統的な女性らしい自己犠牲よりも自立と公益活動に価値をおいている」女性ということになる。⁵ これらはあくまでもイメージであるので、これらすべてを満たしていなくても、自らの意志のもとに従来の生き方の殻を破って生きていけば〈新しい女〉とすることができる。ウェストマコット夫人は未亡人であるので、結婚を否定していない点（ただし、その結婚において夫婦は平等のパートナーシップを築かないとならない、64）や性に関して率直に口にするといった点がこれらの特徴にあてはまらないが、あきらかに彼女は〈新しい女〉である。また、とてつもなく裕福だった父親から相当の遺産を受け継いでいるので、働いてはいないが、彼女は経済的に自立している。

〈新しい女〉としてウェストマコット夫人は集会を開くのだが、その集会の目的は、女性の専門職門戸開放・拡大と売春宿の完全撤廃、そして国政レベルの女性参政権付与である。売春宿の撤廃に関しては具体的に彼女の

口から語られる場面はこの作品には出てこない。かの女が熱を込めて語るのは女性に対する専門職門戸開放・拡大の主張と女性参政権付与である。まず、専門職門戸開放・拡大の主張から見ると、彼女はウィリアム老姉妹との会話の中で、次のように述べる。先ほどの〈女性の使命〉の否定に続く場面の言葉である。

理論上は男性は女性を助けるために何でもやろうとするでしょう。もちろんです。男性の財布がねだられるとき、騎士道精神はどう働くのです？ そのとき男性の騎士道精神はどこにあるのです？ 医者たちは女性が医師資格を取るのに手を貸しますか？ 弁護士は女性が弁護士資格を取るのに手を貸しますか？ 牧師は協会で女性を寛大に扱いますか？ ああ、それは女性の身分を閉ざし、哀れな女性の注意を女性の使命に向けさせるのです。女性の使命！ 餌入れの周りを豚のように、男性が金貨を我先にとろうとしているとき、銅貨をありがたき思い、男性の邪魔をしないこと、それが女性の使命についての男性の見解です。
(17-18)

また別の日に、ヘイ・デンヴァー提督と会話しているとき、提督が「女性には女性の任務があり、男性には男性の任務があり」、「もうすでにすべての大学が女性に門戸を開放し、女医がいるとも聞いている、もうこの辺で女性は満足したらどうか」と言う（41）、ウェストマコット夫人は「では、貧しい女性は何をすればよいのでしょうか？ そういう女性はとても大勢おりながら、就ける職業はとても少ないのです。家庭教師？ でも、就職先はほとんどありません…。提督、女性に何をさせるおつもりです？ 座り込みをして、餓死しますか？（41）」

と切り返す。

彼女とデンヴァー提督のやり取りの背景にあるのは、当時のイギリスの高等教育や専門職の門戸開放に関する次のような事情である。イギリスにおいて女性の高等教育は、1869年にケンブリッジ大学のガートン・カレッ

ジの前身となるヒッチン・カレッジが創設されたことを皮切りに、少しずつ開始し始めた。しかし女性の専門職の解放はなかなか進まなかった。ウェストマコット夫人がウィリアム姉妹に対して述べた意見のなかで挙げている医学界、法曹界、宗教界に限って見てみても、女性の進出は非常に遅れていた。この3つ専門職の中では医師免許取得が一番早かったが、もちろん志す者たちは苦戦した。たとえば、1869年ソフィア・ジェックス・ブレイク (Jex-Blake, Sophia, 1840–1912) たち5人の女性たちがエディンバラ大学で好意的な講師のもとで、医学を学び始めるが、学位を授与する正式な入学とは言えなかった。女性の入学に反対する男子学生の暴動をはじめとする学生や教員の抵抗にあい、彼女たちが大学への学位授与を求める訴訟をおこしても、そして1875年に大学が希望すれば、女子学生を受け入れることができるという法案が政府に承認され、国会を通過しても、エディンバラ大学は学位を認めなかった (Strachey 180, 255)。ソフィア・ジェックス・ブレイクは女性に医学の学位授与することを同意したアイルランドのキングス医科大学で試験を受け合格することによって、医師免許を得た。彼女が医師登録したのは1877年である。1891年の国勢調査によれば、イングランドとウェールズの10歳以上の女性人口11461890人の中で女性の医者 (内科医、外科医、開業医) の数は101人であったそうである (滝内大三、39)。エディンバラ大学医学部を1876年に入学し1881年に卒業したコナン・ドイルには、ソフィア・ジェックス・ブレイクたちとエディンバラ大学の騒動はそう遠くない話として耳にしていたであろう。

法曹界や宗教界の女性の進出は20世紀になってからである。法曹関係では1919年に性差別廃止法が制定された時、法律関係などの専門職が女性に開放された。しかし宗教関係では、英国国教会が女性の司祭を認めるのは1992年である。専門職として大きな雇用のあった軍隊はデンヴァー提督の言葉からわかる通り、男性に独占され、女性の入隊などもっての外であった。

また、ウェストマコット夫人は家庭教師 (住み込み家庭教師、ガヴァネ

ス) 職について言及する。家庭教師は中流の女性が就くことができた数少ない職業であった。⁶ 他人の家とは言え、働く場が家庭であり、女性は家庭にいるものという社会通念に反することがなかったからである。家庭教師は、『四つの署名』(*The Sign of Four*, 1890) のメアリー・モースタンや「ブナの木屋敷の事件」(“*The Adventure of Copper Beeches*,” 1892) のヴァイオレット・スミスなど、ホームズものでは独身女性の依頼人として何人が登場するお馴染みの職である。しかしこの職は求人に対して希望者があまりに多すぎ、そしてあまりに薄給で、そしてあまりに不安定な雇用で、自立を勝ち取ることができないばかりか生きていくのがやっとなんてい場合のある職業であった。女性は「座ったままで、餓死すればよいのか」と彼女が言うのは(41)、この意味においてである。

ウェストマコット夫人の女性の専門職門戸開放・拡大の目的は、裕福で志の高い女性の悪戦苦闘ばかりでなく、死活問題にまで困り苦しんでいる女性たちも視野に入れ、これらすべての苦しんでいる女性たちを救済することである。

次に、女性参政権を見てみる。女性参政権について、彼女は提督と会話しながら、窓から見える男が「読み書きできず、ウイスキー浸りで」あるにもかかわらず、選挙権があるのに、自分には選挙権がないことについて、次のように言う。

ここに私がおります。かなりの教育を受け、旅行をし、多くの社会制度を見て、研究してきた女性です。私はかなりの資産を持っております。私はあの男性がウイスキーに費やしている以上の帝国税を支払っております。それは多額と言えます。それでいながら、私が支払っているお金をどのように配置するかについて、壁を這っているあのハエ同様、私は直接の影響を持っておりません。これは正しいでしょうか？ これは公平でしょうか？ (42)

1869年に女性の地方税納税者には市町村議会の選挙権が、1888年には州・

地方都市議会の選挙権が付与されていたが、国政レベルの選挙権は 20 世紀の第 1 次大戦後の 1918 年のことである。この時も男性が 21 歳以上であったのに対し、女性は 30 歳以上の戸主または戸主の妻という条件が付いた。男女同じ普通選挙になるのは 1928 年である。しかし国政レベルの選挙権付与を求める組織だった活動は、1865 年のケンジントンにおける女性討論協会の設立など、19 世紀後半から始まっており、その歴史は長い。1891 年当時ではミリセント・ガレット・フォーセット (Millicent Garrett Fawcett, 1847-1929) 率いる女性参政権協会の者たちや〈新しい女〉たちが世論喚起を熱心に行っている最中であった。ウェストマコット夫人の開く集会は、この活動の一環である。

III

では、このようなウェストマコット夫人や彼女の主張を他の登場人物たちはどう見ていたのだろうか。大家の老姉妹が彼女に仰天し彼女の意見に不賛成であることはすでに述べたが、老齡に差し掛かった二人の男性が彼女に大きく反応する。デンヴァー提督とウォーカー医師である。二人とも黒い瞳と眉毛を持つギリシャ彫刻のような夫人の顔の美しさ、素晴らしい曲線を描いた女らしい姿に (9) 魅了され、彼女の運動神経に圧倒されるが、二人の意見は最初は全く異なる。デンヴァー提督のほうはウェストマコット夫人の専門職門戸開放・拡大の意見にも参政権にも真っ向から反対である。夫人がいくら説いても、賛成しようとしない。「男性には男性の担うべき義務が、女性には女性の義務があり、それらはそれぞれの本性のように分かれている」と考える (29)。彼は女性たちの権利拡大の主張を船の乗組員の「反乱」と表現する (28)。

それでいて、彼は彼女の計画する女性の権利拡大の集会に出席し演台にまで登ることになる。彼は夫人を「もっとも分別のある女性の一人」と思う (45)。彼は夫人の大海原を航海した経験談や船の話に感激し、海への思いを共有する人間として彼女を高く評価したのだ。彼は「旗を降ろして意

見を変えた」(91)。そして彼女とのあいだに尊敬と趣味の一致に基づいた男同士の友情を生じさせたのである(91)。デンヴァー提督において偏見から理解への方向転換がなされた。

一方ウォーカー医師は初めのうちは「ウェストマコット夫人は少し行き過ぎではあるものの、大体において自分は彼女と同じように考えている」と言う(28)。彼は次のように述べる。

まったくウェストマコット夫人の言う通りです。専門職は女性に十分には開かれておりません。女性は職業面ではいまだにひどい制約を受けています。女性は弱い人たちです。自分のパンのために働かなければならない女性は——衰れで、組合をつくっておらず、おどおどして——権利として要求できるものを恩恵として受け取っています。——略——もし私たちが本当に礼儀正しいのなら、悪戦苦闘している女性が本当に私たちの助けを必要としているときには——私たちの助けを得るか得ないかが死活問題の時には、私たちはかがんで、助け起こさないとなりません。それに、より高度な専門職に女性がつくのは女性にふさわしくないというのは、使い古された言葉です。それは餓死するのは女らしく、神が与えたもうた頭脳を使うのは女らしくないと言っているのです。これは途方もない主張ではありませんか。(28)

彼の専門職開放・拡大の支持の特徴は、困っている女性に対して「礼儀正しい」(*courteous*)という言葉を使うように、困っている女性たちを救済するという騎士道的精神である。

そして彼は彼女に賛成するばかりでなく、親密さを日ごとに増していく。彼はウェストマコット夫人と頻繁に会い、ことあるごとに夫人の判断を仰ぎ、夫人の性格の強さ、決然とした気質、娘たちに「将来の女性の姿として模範とするべき女性である」と頻繁に話すようになった(71)。彼は夫人に魅了され、夢中になっている。このような父親の様子を見て、また、ウェストマコット夫人のこれから「人生の新しい領域に入り、そこでは新しい義務を伴うので、チャールズと一緒に住むことはできないかもしれない」

と言った言葉から(47)、クララは父親が夫人と再結婚しようとしていると思ひ込む。この再婚はクララにとって歓迎できるものではなかった。彼女にとって母親の思い出は神聖視されていたし、誰かが母親に取って代わるなどということなど考えられない(64)。それに、初めの盲目的な愛が過ぎ去った後、ウェストマコット夫人のスタウト・ビールを飲み、紙巻きたばこを吸うといった「奇行」に父親は耐えられないだろうと思った(65)。母のためにも父のためにも、父が夫人に結婚を申し込むのを阻止しないとならない。どうしたらよいだろうか。

妹のアイダに相談すると、二人は父の申し込みを阻止できるよい方法を見つけ出す。その方法とは、男勝りの女性と一緒に住むことがどういうことか父親に思い知らせ、夫人や解放された女性はもう永久にまっぴらだと思わせることである。姉妹は〈新しい女〉になったふりをするのだ。

二人がウェストマコット夫人に「女性の任務と男性の暴虐」について話を聞きに行き、ロンドンに買い物に行った翌朝、ウォーカー医師がダイニングルームに降りていくと、アイダがテーブルの上にアルコール・ランプとフラスコを置いて化学の実験している最中であつた。フラスコからはものすごい悪臭が立ち込めていた。クララはアームチェアーにゆっくりと座り、何かの本に夢中になっている。朝食を出すように召使たちに指示していない。

ウォーカー医師が散歩から帰ってみると、アイダは研究を続け、紙巻きたばこを手を持ち、スタウト・ビールがテーブルに置いてあつた。クララも紙巻タバコをくゆらせ、アームチェアーでくつろぎながら暖炉の前に数枚広げた地図を見ていた。ラム酒も大コップに注いであつた。そして専門職に就くべく、水先案内人になると言う。「女性はみんな、職業に、しかも女性がいつも避けてきた職業に就くべきで」(77)、ラム酒は専門職の人はみんな飲んでいるのだと言う。

アイダはサルを、クララはカメを家の中で飼いだした(80)。そして二人の服装ときたら、クララはウォーカー医師いわく「裂けたスカート」(キュー

ロット・スカート)をはいて、船員用ブーツに便利だからとニッカーボッカーをはいていた(88)。アイダはウェストマコット夫人がはくような短いスカートををはき、「これを着ているととても自由に感じる」と言った(72)。さらには、その晩ウォーカー医師がロンドンのクラブから帰ってくると、彼が目にしたのは、何本ものシャンパンと牡蠣の殻の中で、ハロルドとチャールズをそれぞれわきに侍らせながら、タバコを手に持ち、だらしなくソファーにもたれてる娘たちの姿であった。二人の男性は娘たちが招き、ささやかな夕食会を開いていたのだという(89)。若い独身男性を未婚の娘たちが招待して、もてなし、飲酒しタバコを吸う。ここにきてウォーカー医師の怒りは爆発する。クララとアイダは父親の驚いたことに、自分たちは父親の言う通りウェストマコット夫人を手本にしているのだと言った。それで、とうとうウォーカー医師はウェストマコット夫人に愛想を尽かし、二人はもう夫人を手本にするのをやめ、元の娘たちに戻るようにと言う(90)。彼はウェストマコット夫人の主張の具体的な意味を、つまり、〈新しい女〉とは具体的にどのような存在なのかを知り、自分が間違っていたことを認める。娘たちのたくらみは成功した。

ウォーカー医師は〈新しい女〉の主張に賛成であるが、それはあくまでも信条に過ぎない。彼はほかの女性の自由は擁護するのに、いざ自分の娘たちが自由を得ようとする、と認めない(80)。そんな彼を、ウェストマコット夫人が「言行不一致」と言うごとく(82)、彼は理論上は認めても、身近な現実となると、賛成できない。ウェストマコット夫人が、「いつも男性たちは騎士道精神という言葉を使うのに、いざとなるとその騎士道精神はどこに行ってしまうのか」と言っているごとく(17,18)、ウォーカー医師もいざとなると騎士道精神を忘れる普通の男性だったのだ。彼女は男性を、そして彼らが自慢する騎士道精神の不甲斐なさをよく心得ている。彼女が頼るのは、女性たちが主導する組織的な抵抗運動以外にない。ウォーカー医師においては賛成から反対への転換がなされた。

このようなウォーカー医師の「言行不一致」事件をドイルは滑稽に描き

だす。しかしドイルはウォーカー医師を非難しているわけではない。ウェストマコット夫人の男性がいつも言っている「ご自慢の騎士道精神はどうしたのです」(17)という言葉に表れているごとく、男性のいつものこととして片づけられている。むしろ、このエピソードにおいて一番焦点が当たっているのは、娘たちの、とくにクララの、父親に目を覚ましてもらおうと〈新しい女〉の芝居をする健気な姿である。

IV

クララは「自己犠牲」を旨としている点において(47)、ウェストマコット夫人に相對する位置にいる。クララは母の亡くなった後、母親の任務を受け継いで、家を切り盛りし、召使たちを監督し、父を慰め、自分より弱い妹を支えてきた(22)。すべてを父と妹のために捧げてきた。自分のことなど考えたこともなかった。彼女は自分は恋愛の圏外にいると思っていたが、デンヴァー提督の息子チャールズに求愛される。その時のハロルドの言葉が彼女の価値をよく語っている。彼は自分を「救うことができるのは一つしかなく」、「自分をよりよい道へと導いてくれる愛する女性の手を必要としている」と言い(52)、「自分を選んだことを後悔しない」とクララが訊ねると、ハロルドは次のように言う。

後悔ですって！ 僕は救われたと思っています。このシティでの生活がいかに品位を落とすものか、いかに卑しいか、それでいていかに夢中にさせるか、あなたはご存じなのです。お金がいつも耳の奥でチャリンと鳴っています。他のことは考えられません。心からそれを憎んでいます、どうすれば尊敬する老いた父を悲しませないで、それから身をひけるでしょう？ この墮落に抵抗できる道は一つしかありません。それは、引き下ろすすべてに抗って、僕を支えられるくらい純粋で高貴な家庭の影響を持つことです。僕ははすでにこの影響力を感じていました。あなたと話していると、自分がより良い人間になっていくのを自覚しています。僕と一緒に人生を歩むのはあなたです。そうでなかったら僕は永遠に一人で歩まねばなりません。(53)

ここにはヴィクトリア時代の男性が理想とする「家庭」がある。前述したように、戦場のような競争社会で傷つき疲れた男性が帰ってくる安らぎの場所としての家庭で、男性たちは疲れて傷ついた心を癒し、汚れた心や精神を清め、明日への活力を養う。その癒し清める役を果たすのが妻の役目である。その妻は天使のごとく純粋で清らかで、賢くないとならない。汚い拝金主義の世界で戦ったハロルドを家庭で癒し清め正しい人間へと導く。クララはこの「家庭の天使」の具現として描かれている。⁷

ウェストマコット夫人の魅力に目がくらんだウォーカー医師は、クララとウェストマコット夫人のあいだの綱引きで、一時ウェストマコット夫人の方へと近づくが、クララの力で無事に引き戻される。ウェストマコット夫人は初めからウォーカー医師と結婚する気などなく、彼を自分の方に引き寄せてはいないが、この綱引きにおいて、ドイルはクララに軍配を上げている。もちろんクララが父親を引き戻せるのは、彼女が大木にすぎたる薦のようになよなよと男性にすがってばかりいる女性であるからではない。彼女が引き戻せるのは、彼女がドイルの求める「家庭の天使」でありながら、それを超えたところにいる行動力のある強い女性、つまり、「自分の頭で考え、自分の目で見、自分の感情で行動する」女性 (22) であるからである。クララは自分を持っていて、自分に忠実に行動できる女性である。彼女は自分の目で父親の様子に気づき、自分で父親の幸せを考え、自分の感情に従って行動した。しかし、自分のためではなく、ひとえに父親を思っていることである。

V

では、ウェストマコット夫人をドイルは否定しているのであろうか？ その答えはこの作品の筋が教える。このウォーカー医師の事件は物語の三分の二程度のところで解決され、物語はもう一つの事件、ハロルドの仕事に関する事件へと移る。ハロルドの共同経営者のジェレマイア・ピアソン (Jeremiah Pearson) が客の融資のお金をもって出奔し、ハロルドに一万三

千ポンドもの借金を負わせたのだ。このジェレマイア・ピアソンはウェストマコット夫人の兄であり名打の詐欺師であることが判明するが、わかったところで、ハロルドとデンヴァー提督にはこのような高額を支払うことはできない。ウォーカー医師もクララの持参金として自分の貯金五千ポンドを前渡しすることにするが、これではとても金額が足りない。困ったデンヴァー提督は一人ロンドンに金策に出かけ、途中チャールズ・ウェストマコットと出会い、彼とともに悪徳金融業者を尋ねた後、ウェストマコット夫人の弁護士のところに行き、そこで自分の年金受給権を売却して五千ポンドを手に入れる手はずを整える。そして、チャールズと分かれた後、一人で船会社に行き、就職の約束を取り付けて帰路につく。ハロルドがシティーで債権者たちに会い状況を整理して帰ってくると、負債額は七千ポンドだということが判った。

この後、チャールズとアイダは婚約し、ウェストマコット夫人の家に闇夜に乗じて強盗が入り、強盗に殴られたウェストマコット夫人が気絶するという騒ぎが起こるが、ハロルドの難問はすべて一気に解決することになる。

実は、皆は強盗だと思ったが、押し入ったのはウェストマコット夫人の兄、すなわちハロルドの共同経営者のジェレマイア・ピアソンで、彼は自分の父親のお金を取り戻そうとやってきたのであった。

ウェストマコット夫人の父親は相当な資産家であり息子と娘に多額の遺産を残したが、息子の性格を見抜き、息子に与えようと思っていた金額の全額を息子に譲らず、その一部を娘に預け、息子が所持金を浪費して使い果たしたときに、それを息子のために使ってほしいと娘に言い残した。今までもそのお金を取り戻そうと、ピアソンは妹をたびたび脅かしてきたが、頑として夫人は預かったお金を渡さなかった。しかし今回の悪事を聞いて、今こそ預かった遺産を使うべき時と考え、彼女は提督とチャールズの行った弁護士のところに行き、事情を説明して、その遺産で提督の年金証書を買戻し、ハロルドの会社の負債も支払い、すべてを無事に収めた。昨晚

事情を知らないピアソンがやってきて、遺産のお金を渡すように言った時、兄の悪事を償うためにそのお金を使ったことを告げると、ピアソンは悪態をつき、妹を鉛を詰めたステッキで殴りつけてきたということだった。

このように、ハロルドや提督の惨事はウェストマコット夫人の分別と実行力で無事解消する。

ウェストマコット夫人は道理をわきまえ、行動力があり、何といっても思いやりのある人物として描かれている。確かに彼女は、女性の権利の主張、服装、喫煙・飲酒、自転車を乗り回すことや飼っているペットなど、旧式の人間にはエクセントリックと映る〈新しい女〉である。運動神経が発達していてスポーツ万能すぎるところも、そして立ち振る舞いが女らしくないところにも、普通の男性はたじろぐだろう。しかし、ドイルはウェストマコット夫人を〈新しい女〉の悪評判を全部持っていながら、常識があり、賢く、頭がよく、情け深い女性として、善人で、魅力的な女性として描いている。ドイルはウェストマコット夫人を好意的に見ている。

そして、彼女を美人に、それも、あらゆる気候の国々において様々な美人を見てきて提督が非常に美しい顔と女性らしい身体つきをしていると認めるほど美しい女性にしていることは(40)、ドイルが彼女を好意的に描いていることを示している。

さらに、ドイルがウェストマコット夫人をやさしく見ていると考えられる根拠は、大団円にある。結末において、夫人はアメリカのデンヴァー市に新設される「解放カレッジ」の教授に就任することになる。クララが勘違いした婦人の「新しい領域に入る」という言葉の意味は、教育職に就くことであった。「将来の女性に人生のための戦いを、特に男性のための闘いを準備させる」大学である(147)。彼女の意志は認められ、実現へと向かって更なる進展を約束されるのだ。ドイルはウェストマコット夫人を人間としても、彼女の主張に対しても好意的に書いている。

VI まとめ

このようにドイルはこの作品において〈新しい女〉を好意的に見つめ、その主張を好意的に捉えている。ウォーカー医師のウェストマコット夫人への盲目的崇拝と目覚めの過程は、医師の抱える理論と現実のギャップを見せるため喜劇として描かれ、ウェストマコット夫人の主張自体の否定とはなっていない。ドイルは〈新しい女〉と彼女たちの主張、特に専門職の解放と拡大に賛成であるといえよう。しかし、ウォーカー医師の「言行不一致」に見られるように、彼女たちの主張が実現することは容易ではないと考えている。彼女が大団円において、アメリカのデンヴァーから「保守的で古いイギリスにおける輝かしい闘いを見守っていますからね」と言う言葉に表れているように(147)、ドイルは女性の権利拡張はイギリスはアメリカよりも遅れており、なかなか進展することはなく、彼女はいつまでもエクセントリックな目で見られるが、アメリカでなら彼女は高く評価され、信念の実現に向けて、実力を発揮できると考えている。しかし、確かにアメリカでの女子高等教育の解放はイギリスよりも早かったが、女性の専門職の門戸開放・拡大は、イギリスと同じく 19 世紀末になってもそう容易くはなかった。21 世紀の現代でも「ガラスの天井」の言葉は生きているごとくである。それでも、アメリカの現実はどうであれ、ウェストマコット夫人にアメリカという新天地を与え、そこでの活躍を願っていることは、〈新しい女〉に対する彼の好意的なまなざしを物語る。

もちろん、ドイルは全部の女性がウェストマコット夫人のような進歩的な女性になってほしいと言っているわけではない。ウェストマコット夫人がクララに「そのままのあなた方が好き」と言っているように(148)、「家庭の天使」もいて進歩的な女性もいて、多様な女性のいる社会をドイルは容認している。

女性参政権付与だが、少なくとも、この作品においては、すなわち、この作品を執筆した 1891 年にはドイルは反対することなく寛容にとらえている。しかし 20 世紀に入り、彼が女性参政権運動に不賛成の意を唱えた

のも列記とした事実である。このことに対して、エリー・M・リューボウ (Ely M. Liebow) は「コナン・ドイルは1913年ごろまでは女性参政権付与に反対ではなかった」と言っているが(32)、このリューボウの意見は当たっていると思える。ドイルの女性参政権に対する気持ちは変化したのではないだろうか。ドイルは1913年4月29日の『タイムズ』紙 (*The Times*) のインタビューにおいて「二年前に彼女たちは投票権を得るチャンスがあったかもしれないが、今では一世代のあいだは、得られないだろう」と言っているが、⁸ この間、つまり、1911年から1913年の間に彼の意見が変化する事柄があったのではないかと推測される。その事柄とはエメリン・パンクハースト (Emmeline Pankhurst, 1858–1928) が率いる女性社会参政権同盟 (WSPU, 1903年創設、通称サフラジェット) の過激な破壊活動ではないだろうか、このグループが過激な破壊活動を始めたのは1912年頃である。⁹

彼が反対したのはサフラジェットたちの暴力ではないだろうか。彼が上記の1913年4月29日の『タイムズ』紙 (*The Times*) において合法的な女性参政権活動家 (suffragists) と女性フリーガンたちを区別する必要があると言っていることは、¹⁰ ドイルが合法的で穏やかな活動をするグループ (フォーセット率いるグループ) と闘争性の強いグループ (パンクハースト率いるグループ) があることを認識しており、また、1914年5月31日の『ニューヨーク・タイムズ』紙 (*New York Times*) などにおいて女性参政権活動の女性たちの騒動を話題にするとき「闘争的な人たち」(militants) と言っていることは、彼が問題にしているのは女性参政権活動家の中のパンクハーストのグループが引き起こす闘争性 (militancy) であると推察できる。したがって、ドイルが女性参政権付与じたいに反対であったとは言いきれないところがある。ドイルの女性参政権付与に対する全体像に関してはさらなる考察をこころみたい。

少なくとも、ドイルはこの作品を書いた時期においては、〈新しい女〉に、女性の高等教育や専門職門戸開放、女性参政権付与に寛大であったと言え

る。

註

1 たとえば、1914年5月28日の『ニューヨーク・タイムズ』紙 (*New York Times*) のインタビューで女性参政権運動の過激さについて、「人々の堪忍袋は切れそうであり、リンチが行われる可能性もある」と述べている。また、1914年5月31日の同紙においても、女性参政権運動の過激さについて不賛成の意を表している。これらの発言から、彼を女性参政権付与反対者と捉える研究者が多い。たとえば、Alvin E. Rodin と Jack D. Key はコナン・ドイルは女性には伝統的な役割を果たすべきであり、女性参政権には強く反対していると述べている。Alvin E. Rodin & Jack D. Key. *Medical Casebook of Doctor Arthur Conan Doyle: From Practitioner to Sherlock Holmes and Beyond*. Malabar: Robert E. Krieger Publishing Company, 1984, p. 132.

2 Jordan, Ellen. “The Christening of the New Woman, May 1894.” *Victorian Newsletter*. 63 (Spring 1983) 19–21. New York: New York University.

3 Doyle, Arthur Conan. *Memories and Adventures of Arthur Conan Doyle*. The Blue Toucan, 2021. p. 67.

4 Doyle, Arthur Conan. *Beyond the City*. Independently Published, 2023. 以下このテキストを使用する。笹野史隆、『郊外都市にて』 釧路：エルミオン、2009年。多少の変更があるものの、笹野氏の翻訳を活用させていただいた。

5 Mayhall, Laura. E. Nym. “New Woman” *Encyclopedia of the Victorian Era*. Ed. James Adams. Tom Pendergast, and Sara Pendergast. Danbury: Scholastic Library Publishing, 2003: 110.

6 コナン・ドイルの妹たちも家庭教師になる経験あり。Doyle, Arthur Conan. *Memories and Adventures of Arthur Conan Doyle*. p. 44.

7 「家庭の天使」というのは、Coventry Patmore (1823–96) の *Angel in the House* (1854–63) というタイトルの詩が謳った女性像が女性のあるべき姿として19世紀の人々に受け入れられ、その理想像の代名詞として当時から人々に使用された。

8 *The Times*. 29 April 1913. p. 10. “Sir A. Conan Doyle on Outrages.”

9 パンクハースト率いるサフラジェットたちが闘争性を強め、ポストや、窓ガラスの破壊、爆破などの破壊活動を始めたのは、1912年からである。

10 ドイルは「誠実で合法的なサフラジスト、女性フーリガン、そしてそのフーリガンたちにお金を与えて害意ある悪戯をさせる卑しむべき連中を区別することが必要だ」と言っている。*The Times*. 29 April 1913. p. 10. “Sir A. Conan Doyle on Outrages.”

Works Cited

Alvin E. Rodin & Jack D. Key. *Medical Casebook of Doctor Arthur Conan Doyle: From Practitioner to Sherlock Holmes and Beyond*. Malabar: Robert E. Krieger Publishing Company, 1984, p. 132.

- Doyle, Arthur Conan. *Beyond the City*. Independently Published, 2023. 笹野史隆、「都市郊外で」釧路：エミルオン、2009。
- . *Memories and Adventures of Arthur Conan Doyle*. The Blue Toucan, 2021. p. 67.
- Ely M. Liebow. “Experience Veiled in Pseudonyms.” *The Quest for Sir Arthur Conan Doyle*. Ed., Jon L. Lellenberg. Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois UP. 1987.
- Jordan, Ellen. “The Christening of the New Woman, May 1894.” *Victorian Newsletter*. 63 (Spring 1983) 19–21. New York: New York University.
- Mayhall, Laura. E. Nym. “New Woman” *Encyclopedia of the Victorian Era*. Ed. James Adams. Tom Pendergast, and Sara Pendergast. Danbury: Scholastic Library Publishing, 2003: 110.
- Strachey Ray. *The Cause: A Short History of the Woman's Movement in Great Britain*. London: G. Bell & Sons Limited. 1928.
- The New York Times*. May 31. 1914.
- . May 28. 1914.
- The Times*. 29 April 1913.
- 滝内大三、「19世紀イギリス女性の教育とキャリア形成」『大阪経済大論集』第56巻第6号。2006年3月。